Q-Lab
(第２回OD、第３回OD、第４回CD、第５回CD)

Kyushu Learning Improvement Network for Staff Members in Higher Education

賛同校　(私) 沖縄国際大学　http://www.okiu.ac.jp/

基本情報

〒901-2701 沖縄県宜野湾市宜野湾2-6-1
学生数：5,731　[男]3,069　[女]2,662　*2013年05月01日現在
学部・大学院:4学部、3研究科

教育トピック

・海外インターンシッププログラム
・エコアクション21
・組織的FD活動の推進

Q-Links への期待

　Q-Linksで得た知恵を、教員、職員、学生が一体となった教育活動の展開に役立てていきたいと思います。また、本学の持続的な教育活動の進化に役立てるために、Q-Linksで展開される色々な取組を参考にしていきたいと思います。

賛同校　(国) 鹿児島大学　http://www.kagoshima-u.ac.jp/

基本情報

〒890-8580 鹿児島県鹿児島市郡元1-21-24
学生数：10,642　[男]6,598　[女]4,044　※2012年05月01日現在
学部・大学院：9学部、10研究科

教育トピック

・島嶼、環境、食と健康、水、エネルギーの重点領域研究
・社会人を対象とした「かごしまルネッサンスアカデミー」を開講し地域の人材育成に貢献
・海外体験学習・研修プログラムの充実
・地域医療を担うプロフェッショナリズム教育
・取材学習を取り入れた循環型初年次教育
・実践的コア・サイエンス・ティーチャー養成スクールと活動拠点構築プロジェクト

Q-Linksへの期待

　個々の教職員の資質開発や日常的な教育改善活動に関する情報共有だけでなく、大学の役割や教育開発とは何かという本質的な問いに関しても、Q-Linksのネットワークを通して皆さんと考えていきたいと思います。

Q-Lab

Kyushu Learning Improvement Network for Staff Members in Higher Education

本報告では、2012年度に開催されたQ-Lab（キューラボ）についてご紹介します。

1.Q-Labとは…… 5
2.Q-Lab ODプロジェクト…… 7
・Q-Lab第2回ODプロジェクト…… 7
・Q-Lab第3回ODプロジェクト…… 21
3.Q-Lab CDプロジェクト…… 25
・Q-Lab第4回CDプロジェクト…… 25
・Q-Lab第5回CDプロジェクト…… 29
4.History of Q-Lab …… 35

OD:Organizational Development（組織開発）
CD:Curriculum Development（カリキュラム開発）

■Q-Labとは

「Lab（ラボ）」とは、「Laboratory（ラボラトリー：実験室、工房）」を意味し、教育改善における問題について、Q-Linksメンバーシップの協働によって新たな手法やアイデアを創出･試行していく場であることを表わしています。また、「Lab」には個人の能力開発とともに、「collaboration（コラボレーション：協働）」の意味も含まれており、教職協働による組織力を高めていくことへの期待も込められています。

■FD・SDの現状認識と課題意識（Q-Labの企画背景）

教育改善に資する取り組みであるFDは、時代背景や社会情勢により様々な位置づけがなされてきました。Gaff（1975）やMenges（1988）などの分類によると、狭義にはID（Instructional Development：教授法開発）、広義にはそれに加えてPD（Professional Development：専門職としてのキャリア開発）、CD（Curriculum Development：カリキュラム開発）、OD（Organizational Development：組織開発）などが要素として挙げられます。例えば、関（1988）がGaff（1975）の指摘に言及する中で「大学で企画・実施が最も困難とされる組織開発（OD）のアプローチが大学においてさえも不可避の課題となっていることを示唆している」と述べているように、CDやODの必要性は以前から議論に挙がっていました。しかし、これまで日本におけるFDは、IDの側面が強かったことは否めません。CDやODについては学部の新設・改組やセンターの設置など、大学の営みの中に埋め込まれ、研修という文脈では講演会等における事例紹介がなされる程度だったと言えるでしょう。

また、多くの場合、FDは教員向けのプログラム、SDは職員向けのプログラムと位置づけられ、取り組まれてきました。確かにそれぞれの職能に合わせた研修はとても重要です。しかし一方で、カリキュラムや組織の改善・開発の現場を考えれば、目的に向かって教員・職員のどちらもが関わり、共に取り組んでいる現実があるにも関わらず、それらが研修そのものの題材となる機会は少なかったと言えるでしょう。これらを背景に、Q-LabはCDやODをテーマに教員・職員が共に学びあう場として設計されることとなりました。すでに各大学で取り組まれている職制別のFD・SDに加わる、目的別プログラムという位置づけです。

■Q-Labの学習モデル

下図にQ-Labの学習モデルを示します。Q-Labはこれまで多く行われてきた職制別研修のような、講師から何かを教わり、知識やスキルを習得する場としては設計されていません。なぜなら、知識の伝達・習熟の場は、すでに各大学にて取り組まれている上に、学会や企業による研修等、さまざまな学習機会があるからです。また、知識や経験を得るだけに留まらず、それらをいかに統合し、発展させ、目の前の課題に活用していくかというアプローチ（発想）を培うことも必要です。そのため、Q-Linksのメンバーシップが集い、知識や経験を共有し、新たな手法やアイデアを創出・試行する場としてQ-Labを設計しました。

参加者は職制や所属等が多様になるように少人数チームに分けられて、3ヶ月の長期型もしくは1泊2日の短期（合宿）型のプロジェクトに臨みます。ゲストスピーカーからの理論や事例の話題提供や参加者自身の知識や経験を持ち寄り、対話や省察を通してテーマについて探究します。ここで重要なのは、ゲストや自分たちの経験を観察する際、単に出来事として何が起きたのかを聴くだけで満足せずに、その出来事の背景にどんな組織や制度などの構造があったのか、そこに関わっていた人たちはどんな態度でどのような行動をしたのかについて探究することを目指すことです。そのためにも対話が促進され、視座が偏らないようにファシリテーターによる発問や視覚教材やゲーム等のアクティビティが参加者の探究を促します。

これらプロセスを通じて、参加者は大学教育改善の課題の解決策を得るというよりも、課題と上手に付き合うためのアイデアや発想を培うことが目的とされています。また、プロジェクトで探究した内容は、テーマにかかるコツや技、問いとして成果物にまとめられ、Q-Linksメンバーシップへ共有されます。

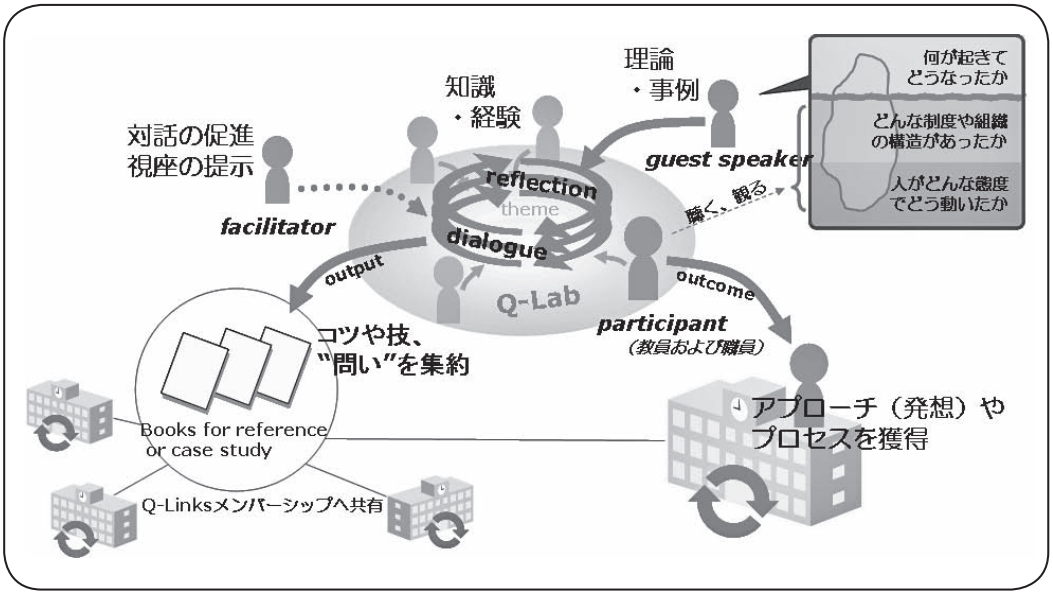


図　Q-Labの学習モデル

<参考文献>

Gaff, Jerry G.（1975）*Toward Faculty Renewal: Advances in Faculty, Instructional, and Organizational Development,* San Francisco: Jossey-Bass Publisher.

Menges, Robert J. and Mathis, B. Claude,（1988）*Key Resource on Teaching, Learning, Curriculum, and Faculty Development: A Guide to the Higher Education Literature,* San Francisco: Jossey-Bass Publisher.

関正夫（1988）『日本の大学教育改革－歴史・現状・展望』玉川大学出版部

有本章（2005）『大学教授職とFD－アメリカと日本－』東信堂

田中岳（2011）「ファカルティ・ディベロップメントと組織変革－2006年度から5年間の高等教育政策動向に学ぶ（特集テーマ FDを再考する）」九州大学高等教育開発推進センター編『大学教育』第16号, pp.1-13.

Q-Links STUDIES 2011より転載（文責 久保山宏）

Q-Lab OD（Organizational Development: 組織開発）プロジェクト

Kyushu Learning Improvement Network for Staff Members in Higher Education

■ODプロジェクトとは

Q-Lab OD（Organizational Development: 組織開発）プロジェクトは、大学の教育改善に資する「組織づくり」について学び合う場です。とはいえ、新しい学部やセンター等の設置、事務局の再編といった成功事例の拝聴、あるいはそれらと立ち向かうためのテクニックについて伝授しようとする場ではありません。もちろん、チームワークやリーダーシップが啓蒙されることもないでしょう。

Q-Lab ODプロジェクトでは、組織づくりにおいて繰り広げられる「場面」に着目し、そこで何が起きているのかを語り合います。Q-Linksメンバーシップの持ち寄る多彩な体験、経験、知識、知恵などが駆使され、プロジェクトのテーマが深められていくスタイルです。分かった（解決した）ような気分となりやすい結論を安易に持ち帰ることは、残念ながらできません。プロジェクトで語り合う（学び合う）ことを通じて、自分一人では気づくことのできなかった、「組織づくり」に対する“自分の言葉”、明日からの態度や行動の源泉を浮き彫りにすることが期待されています。

Q-Lab 第 2 回 OD プロジェクト

Kyushu Learning Improvement Network for Staff Members in Higher Education

■企画概要

大学の現場でよく耳にする話として、次のような類はないでしょうか。FDを推進させようと自分に白羽の矢が立った。FDは門外漢だけれども、徐々に実施していくと活動も大きく動き始めた。あるいは、何から手をつけていいのか悩みが大きくなるばかりだった。総務系の仕事から初めて教学系の仕事へ異動した。外から見て感じていた改革案を実行にうつすべく前向きに努めた。一方で、教学系から総務系へ異動となった同僚は、仕事の内容も大幅に変わり今ひとつ意欲がなさそうに見える。

大学の現場では山積する課題への解決策を探ろうと、多くの人々が知恵を絞っています。大きな大学でも小さな大学でも、その営みの中で事業の大小を問わず様々なことが行われていることでしょう。そんな解決へのアプローチが動き出すとき、私たちは大学組織の一員としてどのように向き合っているのでしょうか。ゼロからはじまることもあれば、引き継いではじまることもある課題解決へのアプローチ。どうすれば活力ある組織として取り組めるのでしょうか。ゲストや参加者同士が自身の体験を語り合うことを通じて探りたいと考えています。

●テーマ

「動き出す時－変革・チャンス・活力－」

●日時

Step1　2012年06月15日（金）　10:00 ～18:00
Step2　2012年06月16日（土）　09:30 ～17:00
Step3　2012年07月27日（金）　12:30 ～18:00

●会場

九州大学箱崎キャンパス

●募集対象

Q-Linksメンバーシップのうち、大学の“教育改善に資する”組織づくり（組織の新設、改編など）に携わった経験のある方、もしくは現在携わっている方を想定し、募集を行いました。また、本プロジェクトでの修得内容をより効果的に活用・実践するために、個々の組織単位（賛同校）で教員と職員が一緒に参加することを奨励しました。

●参加者数（大学）

10大学14名（教員2名／職員12名）　※教職員ペアでの参加は1大学。

（沖縄国際大学、鹿児島大学、九州大学、長崎県立大学、長崎国際大学、佐賀大学、福岡教育大学、福岡歯科大学、琉球大学、賛同者［東北大学］）

●チーム分け

所属大学の規模や設置形態、教職員の職制が多様になるように振り分けた、4つのチームによるチーム活動を基本に進めました。

・チームシャイ（沖縄国際大学、九州大学、福岡教育大学、福岡歯科大学）
・チーム九州好き（九州大学、佐賀大学、長崎国際大学）
・チームおつまみ（鹿児島大学、九州大学、長崎県立大学、福岡歯科大学）
・チームがんばろう日本（東北大学、福岡歯科大学、琉球大学）
※チーム名はメンバーによる命名

●プログラム概要

Step1	**大学が何かをはじめる時** ～事例を手がかりにゲスト（話題提供者）との対話を通して課題を認識する場～ 午前中のオリエンテーション～昼食を通して、参加者がプロジェクトについての理解を深め、チームを作り、互いに知り合いました。その後、ゲストからの話題提供を通じて、今回のテーマを認識。さらに、ゲスト、参加者交えて意見を交わし、テーマについて深めていきました。
Step2	**活力の源泉を考える** ～互いの経験を語り合い課題を深めていく場～ オリエンテーションにてStep1を振り返ってStep2に臨みました。まず、参加者同士が自身の体験を語り合うストーリーテリングの時間。その後、ゲストのエピソードやチームメンバーのエピソードを手がかりにしながら、テーマについて探究・発想していきました。
Q-pantry	Q-pantryと名づけたWeb掲示板システムを利用し、チーム毎に遠方のメンバーとも情報共有・意見交換をしながら、Step3に向けて成果物（ケーススタディ教材）のまとめ作業を行いました。
Step3	**活力を分かち合う** ～表現した“問いかけ”に共に向き合い、相互に評価し合う場～ オリエンテーションにてこれまでの経緯やStep3の流れを確認した後、各チームの成果物（教材）を互いに出題し、取り組みあいました。各チーム出題後には、作成チームから成果物の作成企図の発表があり、他チームから教材に対するフィードバックを行いました。最後にはプロジェクト参加者全員で全過程を振り返りました。
Brush-up	Step3終了後、他のチームからのフィードバックを参考に、約1カ月間、成果物をブラッシュアップし、プロジェクトは完了しました。

■Step1　大学が何かをはじめる時

●日時

2012年06月15日（金）　10:00 ～18:00　※終了後、懇親会

●会場

九州大学箱崎キャンパス　21世紀交流プラザⅠ 1F多目的ホール

九州大学箱崎キャンパス　旧工学部本館3F第1会議室

●話題提供者

井下　理（慶応義塾大学 総合政策学部　教授／大学院政策・メディア研究科委員）

樋口浩朗（山形大学小白川キャンパス 人文学部事務室　係長）

●ファシリテーター

久保山宏（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）

田中　岳（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　准教授）

●プログラム

09:30－10:00	開場・受付
10:00－10:45	オリエンテーション（開会、チーム分け、自己紹介、Q-Labの説明）
10:45－11:15	ウォームアップ（ブレインストーミング）
11:15－11:40	オリエンテーション（ODプロジェクトのプロセスの説明等）
11:40－13:00	昼食休憩
13:00－15:50	話題提供、相互インタビュー ※
15:50－16:00	休憩
16:00－16:35	チーム・ブリーフィング（話題提供の振り返り）
16:35－17:45	Q&Aセッション（ゲストとの対話）
17:45－18:00	オリエンテーション（Step2の説明、ストーリーテリング準備、閉会）
18:30－	懇親会

※Step1の話題提供の時間は、「九州大学教育改革研究会」として、参加者以外の高等教育関係者にも広く開放されました。

●当日の様子（内容）

本ODプロジェクトのオリエンテーションに続いて、参加者のチーム分け。そして、「チーム・メンバー」を互いに知り合った後は、このプロジェクトで提出する成果（まとめ）と、チーム・メンバーそれぞれに違う“活力”のイメージを共有。そんなウォームアップ（ブレインストーミング）後は、午後から登壇するゲスト（話題提供者）と一緒にランチをとりました。

午後のメインは、『大学が何かをはじめる時』というテーマで開催される教育改革研究会の聴講。ゲスト（話題提供者）は、井下理氏（慶應義塾大・教員）と樋口浩朗氏（山形大・職員）のお二人。1時間半のレクチャー後には、フロアとの意見交換。最終盤には、九州大でカウンセリング活動を行っている福盛英明氏から"Professional's perspective"と題したコメント（心理学からの知見）が加えられました。

研究会を終えると、ゲスト（話題提供者）とQ-Lab参加者との濃密な（とてもQ-Linksらしい）時間。フォーマルな

場ではなかなか言い尽くせない・聞き出せない本音が交換されます。ゼミナール形式の場によってそれらが披露されることで、テーマが更に深まっていきました。

夜には懇親会をもって明日への活力を養いました。

■Step2　活力の源泉を考える

●日時

2012年06月16日（土）　09:30 ～17:00

●会場

九州大学箱崎キャンパス　21世紀交流プラザⅠ 1F多目的ホール

●ファシリテーター

久保山宏（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）

田中　岳（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　准教授）

●プログラム

09:00－09:30	開場・受付
09:30－10:00	オリエンテーション（Step2の説明、チェックイン）
10:00－11:30	ストーリーテリング
11:30－12:50	昼食休憩
12:50－13:45	アクティビティ
13:45－14:30	ダイアログ①
14:30－14:40	休憩
14:40－15:35	アクティビティ
15:35－15:50	休憩
15:50－16:00	アクティビティ
16:00－16:25	ダイアログ②
16:25－16:30	オリエンテーション（Step3の説明）
16:30－16:38	ミニレクチャー（ケーススタディ教材づくりのツボ）
16:38－16:58	チーム・ミーティング
16:58－17:00	閉会

●当日の様子（内容）

昨日のStep1を振り返ることに続いては、Step2のオリエンテーション。一日の流れを確認します。その後は、午前の時間を目一杯に活用したストーリーテリング。参加者が自身の体験を整理し、語り尽くす時間。大学で組織的な取組みが動き出した時に一体どんなことが起きていたのでしょうか。チーム・メンバーが真剣に耳を傾けます。

昼食後は、Q-Linksが鉄板ネタとしているアクティビティやDVDを通じて、発想が豊かになる対話について体感するところからスタート！そして、Q-Linksの新兵器？「ダイア

ログ・キューブ」を活用した対話へ。六面体は、どのような問い掛けを各チームにもたらしたのでしょうか。午前のストーリーテリングで集められた緊迫のエピソードも、キューブを転がす楽しさに助けられて和やかに？分解されていきます。

その後は、これまたQ-Links初挑戦の「LEGOワーク」！ LEGOや会場にあるものを使って表現するのは、“活力の源泉”。頭で考えるよりも先に、“手で考える”ことが求められます。Prototypingに挑むといったところでしょうか。完成したチーム・メンバーそれぞれの作品は、チームで一つの物語としてまとめられ披露されました。不思議なことに、チームの物語ができあがっていきます。その作品を前に、成果物を通して何を伝えたいのかについて各チームは対話を続けました。

最後には、Step3の概要とQ-pantryの取扱、成果に関する説明の時間をもって、Step2の探究と表現という時間が終わっていきました。

■Step3　活力を分かち合う

●日時

2012年07月27日（金）　12:30 ～18:00　　※終了後、懇親会

●会場

九州大学箱崎キャンパス　旧工学部本館3F第1会議室

●ファシリテーター

田中岳（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　准教授）

●プログラム

12:00－12:30	開場・受付
12:30－13:00	オリエンテーション（開会、Step3の説明、チェックイン）
13:00－16:20	セッション&レビュー 1.チームシャイ 2.チーム九州好き 3.チームおつまみ 4.チームがんばろう日本
16:20－16:30	ふりかえり1（チームで）
16:30－17:10	ふりかえり2（参加者全員で）
17:10－17:25	ふりかえり3（機関毎に）
17:25－18:00	修了式（閉会式）
19:00－	懇親会

●当日の様子（内容）

チームのメンバーと協力して捻り出した成果を各チームが示し、全参加者がその成果と向き合い、高め合う場が始まります。

出題（成果を発表する）チームのメンバーを除く、全参加者が新たにグルーピング。そして、実際に成果（活力に関する問い掛け）と取り組みました。成果と取り組むことで学習を深め、続いて成果の質を高める視点で出題チームに貢献します。その後は、出題チームから出題意図や作成企図が披露されました。もちろん、全参加者からは、フィードバックが投げかけられます。この発表と質疑を終えれば、それら重層的なフィードバックを素材に、グルーピングから離れ再集合した各チームが成果について振り返る時間をもちます。

以上をセットに、休憩をはさんでセッションが続けられました。

Step3の最後は、全参加者がグルッと円に座り直してのQ-Lab（体験）について分かち合う時間。トーキング・オブジェクトが対話を深めていきます。

閉会式には、修了書が授与され、またQ-pantryによる成果のブラッシュアップが念押しされながら、無事にStep1、Step2、Step3のプログラムを終えていきました。

◆実学◆

後藤 大樹（九州産業大学 芸術学部４年）

C O L U M N

九州産業大学芸術学部４年の後藤大樹です。普段はデザインについての勉強をしています。今回、Q-linksのポスターをデザインさせていただきました。今までのポスターデザインとは異なる、すっきりとした雰囲気のものを造りたいと考え、なるべく無駄な情報が入らないよう心がけました。また、自分がデザインしたポスターをたくさんの人に見ていただくのは今までなかったことなので、貴重な経験となりました。ありがとうございます！

私はあまり大学に所属しているということにとらわれず、教えられるのではなく、自ら学びにいく姿勢が大切だと考えています。そのため、大学の授業より学内外のプロジェクトに参加することや、デザインの小さな仕事を重ねていくことで勉強をしてきました。

最近では、Tokyo Designers Weekというデザインの甲子園のようなイベントに九州産業大学チームとして出展し、学校賞・作品賞・プレゼンテーション賞の３部門でセミグランプリを受賞しました。それまでは東京でデザインの勉強ができないということに若干のコンプレックスを抱いていたのですが、これらの受賞を機に「地方でも頑張れば評価されるんだ、大事なのは個人のがんばりだ」と思えるようになりました。

個人の活動では、今年の１月に大阪芸術大学写真学科の展示用ポスターのデザインをさせていただきました。相手の望み通りのものをデザインするには、相手とのコミュニケーションがすごく重要なのですが、相手が大阪のため実際に会って話すことができず、電話やメールのやりとりを行いながら少しずつ制作していきました。

本気で作ったものを相手に見せるときは、否定されたらどうしようと不安になるのですが、喜んでいただけたので、すごく嬉しかったです。また、僕がデザインしたポスターが大阪の街中にたくさん貼られたことで、僕の中で大きな達成感がありました。

■成果物（ケーススタディ教材）

◎チームシャイ

「大学組織で取り組む学生のメンタル支援」

※許可なく転載・利用することを禁ずる

Q-LINKS
九州地域大学教育改善 FD・SD ネットワーク

Q-Lab 第 2 回 OD プロジェクト

チーム　シャイ

大学組織で取り組む学生のメンタル支援

学務課職員 A は、窓口で日々学生からの相談を受けている。最近は、メンタル面で学業や大学生活で悩みを抱えている学生が多く相談に訪れるようになっている。学務課職員 A はいつも学生たちのために何かできることはないかと考えていた。

大学では、近年メンタル面で悩みを抱える学生が退学している状況に憂慮しており、ここ数年増えていることについて、原因究明を行いたい対応策を検討していきたいと考えているところだった。

学務課職員 A は、4月より、財務課から学務課へ異動し、まったく仕事の異なる学生の対応を適切に行えるのか、不安であった。

ある日、一人の学生 B から退学について相談を受ける。学生 B の両親は、学生にはなんとか卒業まで学業を全うしてもらいたいと考えている。学生 B の様子からするとメンタル面で問題を抱えているようだ。

学生 B のアカデミックアドバイザーである教員 C は、過去、学務課職員 A とは財務課に所属していた際にトラブルになったことがあり、現在はあまり交流がない。

学生 B は、県外の高校から進学してきた学生で、大学には、出身高校からの学生は彼ただ一人だった。また、クラブ、サークル活動も積極的に参加する方ではなかった。故郷から遠く離れた地で学業、学生生活を一人で続けていくことは、メンタル面で非常につらく、他の学生ともうまくなじめない状況があり、大学に来ることができなくなっていて、退学について相談に来たという。

学長も学生のメンタルヘルスの問題については、重大な問題として認識しており、その方策を講じるよう、学務課職員 A と教員 C に命じるのであった。

学生 B は、元気を取り戻し、前向きに物事を考えることができるようになって、学業を続けていく決心をする。

また、学務課職員 A は、これからも担当である学生の教育支援のための学生から相談を受けることに喜びを感じ、自信をもてるようになった。教員 C は、学務課職員 A との関係を修復させ、学生支援のために一緒に考えていくようになった。

学生が退学をせず、学務課職員 A と教員 C が関係を修復させ、学生支援のために一緒に考えていくことになったのは、いったい何が起きたからだと思われますか？

次の 3 つのキーワード、「対話」「共有」「交流」を必ず含めながら事態を推察してください。そのうえで、全体のストーリーを再読し、全体に通底している『大学という組織における活力について、お考えください。

※許可なく転載・利用することを禁ずる

◎チーム九州好き

「協働で乗り超えるゼロからの仕事」

Q-LINKS
九州地域大学教育改善 FD・SD ネットワーク

Q-Lab 第 2 回 OD プロジェクト

チーム　九州好き

協働で乗り超えるゼロからの仕事

大学職員となって 7 年目のあなた。頼りがいのある上司の T 課長や同僚らに囲まれ、前向きに仕事に取り組んでいた。ある日突然、新設学部の HP 作成の仕事を S 課長補佐に任された。学部の知識も HP 作成の経験も全く無い。

4 カ月後の HP 公開を目指し、早速 HP 作成に取り掛かったあなた。HP 作成を指示した S 課長補佐からは具体的なアドバイスは全く無い。まずは、他大学の HP を参考にしながら、思考錯誤の上、内容・構成案を作成した。早速 S 課長補佐と T 課長に見せたが、S 課長補佐からは「他の大学も大体こんな感じなの？」と言われただけ。一方、T 課長からは「学部が目指す教育や人材育成がよく伝わらないので、この資料を参考に情報を加えてみては？」とアドバイスを受けた。

「T 課長のアドバイスを参考に、初めから考え直してみよう。」と、学部設置時に作成された資料なども参考に再度取り組み始めたが、なかなかアイディアが纏まらない。「任せてもらった仕事だけど、自分一人ではもうどうして良いか分からない。この仕事どうしよう。」あなたは自分一人の力に限界を感じ、途方に暮れてしまった。 HP 制作業者からは「大体のイメージやコンセプトの情報を早くいただけますか？」と催促されてしまう。

思い詰めた表情のあなたを見掛け、T 課長が「大学には教務課や学生課、会計課など様々な部署があって、皆色々な悩みを抱えているよ。そういえばこの間広報担当の A さんが HP での情報発信について愚痴をこぼしていたなぁ。他所の大学 HP を参考にするのもいいけど、ちょっと A さんに話を聞いてみたら？必要なら私からも連絡を取るよ。」と声を掛けてきた。

T 課長の話を聞いたあなたは、同様の悩みを持つ職員が他部署にもいることを知り、そのような情報を得る機会が今まで無かったこと、自らもその機会を作る努力をしなかったことに気付く。

HP 公開後まもなく、民間が実施している大学サイトランキングでユーザビリティが高い HP の一つに取り上げられ、高校生や保護者からは「知りたい情報が分かり易く掲載されている」と大変好評だ。学生からも「授業料免除などの申請情報もあって提出期限にも注意しやすい」と好評で、他大学から HP に関する問い合わせが増えてきた。

このような結果になったのは、いったい何が起きたからと思われますか？

次の 3 つのキーワード、「情報収集」「縦割り」「立場を変えた視点や思考」を必ず含めながら事態を推察してください。そのうえで、全体のストーリーを再読し、全体に通底している『大学という組織における活力』について、お考えください。

※許可なく転載・利用することを禁ずる

◎チームおつまみ

「ゼロから始まり次につながる!?」

Q-LINKS
九州地域大学教育改善 FD・SD ネットワーク

Q-Lab 第 2 回 OD プロジェクト

チーム　おつまみ

ゼロから始まり次につながる！？

新しい部署にきて間もないあなたは、ある日、初めて耳にするような仕事に携わることになりました。これまでに全く実績のない事業です。何から手をつけて良いものか、また、誰に相談したら良いものか、皆目見当がつきません・・・。

あなたは国立○○大学の国際部に所属する係長Ａです。４月に現在の部署に異動になったばかりでまだ数ヶ月しか経っていません。

ある日、歯学部の教員Ｂから、カンボジアで歯周病の専門医養成プロジェクトを JICA の支援で行いたいとの相談がありました。

教員Ｂは、カンボジアに出張した際に、都市部でも、歯周病の専門医が圧倒的に不足している状況を知り、どうにか、現地で専門医を養成したいと思い立ったとのこと。このことを JICA の知人に相談したところ、大学独自でプロジェクトの詳細を企画し、企画書を JICA の関連部署に持ち込んでみてはどうか、というアドバイスを受けました。

教員Ｂは、企画書を作成するにあたり、予算の組み方や現地での予算執行についてどうしていいか分からず、国際部に相談にきたということでした。

とりあえずの目的としては、実現性のある企画書を作り、JICA の事業として採択され、資金を得ることですが、この大学では、プロジェクトの運営（実務面）に関して、実績やノウハウが全くないため、ゼロからのスタートです。

自分なりに、過去の資料やホームページ等でＪＩＣＡのプロジェクトについて調べてみました。国立大学では、ＪＩＣＡの事業による教員の専門家派遣はよくありますが、大学自体が海外でプロジェクトを主体的に実施するというのは、あまりないケースのようです。もちろん、Ａ大学でもこのようなプロジェクトの実績はありません。プロジェクト実施にあたっては、現地でお金を利用することから、大学が予算を執行するのも難しく、問題が山積みです・・・。また、プロジェクト運営について、現地に長期間滞在して事務的にサポートする人も、これから探す必要があります。さらに、カンボジア情勢に関して自分に一切の知識がないのも不安なところです。

JICA の支援で歯周病の専門医養成プロジェクトを現地で実施することとなり、プロジェクト実施の資金として、JICA からは一億円の支援を受けることになりました。

このことがきっかけで、別の案件（工学分野）でのプロジェクト実施の相談があり、今後も継続して JICA からのプロジェクト受託が期待されます。

さらに、国際部では、プロジェクト終了後に、国際関係に携わる教職員向けの報告会をすることになりました。今回、確立されたノウハウを活かして、各部局の教員に対して国際開発協力における事業の組織的なサポートも期待できそうです。

この事態（状況）になってしまったのは、いったい何が起きたからと思われますか？

次の３つのキーワード、「コラボレーション」「産学連携」「ある講演会での出会い」を必ず含めながら、事態（状況）を推察してください。そのうえで全体のストーリーを再読し、全体に通底している『大学という組織における活力』について、お考えください。

◎チームがんばろう日本

「降ってきたテトリス」

※許可なく転載・利用することを禁ずる

Q-LINKS
九州地域大学教育改善 FD・SD ネットワーク

Q-Lab 第 2 回 OD プロジェクト

チーム　がんばろう日本

降ってきたテトリス

あなたは、教務係の配属７年目の主任事務職員です。つい最近、職員定員が削減されたため若い係員２名と業務を遂行せざるを得ません。また、上司の櫻井課長は、中途採用されたばかりで学内のことについて把握できておらず頼りにできません。

あなたの大学は、文部科学省のあるプログラムに採択されました。教務係は、プログラムに採択されたという結果だけを急に知らされることとなります。このプログラムについては、学長等の関係教員と補助事業を計画・申請する庶務担当の二宮さんと中途採用の櫻井課長のみで打合せをして申請を行ったため、学務担当である教務係員は概要すら知らされず、何が始まるのか全くわからない状況です。

プログラムの採択を聞かされて間もないある日、会議室と講義室が改修され映像機器やマイク設備、テレビ会議システムといった目新しい機器類が設置されました。このプログラムでは、テレビ会議システムを利用して、日本各地の連携大学をネットワークで繋ぎ、共通のシラバスに従って最新の機器を使った講義を行います。そのため、教員へは新しいシラバス等の作成業務、教務係へはテレビ会議システムの運用、新型の機器を講義で使用する教員への操作方法の周知徹底等々の様々な業務が降りかかってくることになります。

さらに、教室の備品管理者でもある教務係が機器選定に関与していなかった為、様々な不具合が見つかります。また、新型の機器は操作が難しく講義担当の教員からは不満の声があがります。この事態に学長からは、経費をかけずに早急に対応せよ！と無理な指示が来ることとなります。

そんな状況のなか、あなたは突然、二宮さんのポジションへの人事異動を命じられることとなります。従って庶務担当には学務経験者のあなたが着任することになりました。

プログラムは次第にうまく動き始めました。学長もご満悦です。補助事業が上手くいったことから、大学ではこの体制を上手く保持しながら、さらに大きな事業にもチャレンジしていけることとなったのです。

苦しい状況を打開したのは、いったい何が起きたからと思われますか？

次の３つのキーワード、「温度差」「連携」「双方向」を必ず含めながら、事態（状況）を推察してください。　そのうえで全体のストーリーを再読し、全体に通底している『大学という組織における活力』について、お考えください。

■成果物の作成企図

◎チームシャイ

【チームシャイが考えたストーリー】

大学では、以前から近年メンタル面で悩みを抱える学生が退学している状況に憂慮しており、そのような状況の中で、学務課職員Aは学生から相談を受け、問題と直面する事となった。

そのような時、学長から直接呼び出され、教員Cと協力をして、学生支援のための企画を検討するように指示をされる。教員Cとの関係が良好で無い中ではあるが、一人の学生Bを通して対話をし、課題を共有する二人は、学長の要請もあり、学務課職員Aは教員Cに経緯を相談し、学長に他の教職員とともに学生生活支援プロジェクトチーム（仮名）を立ち上げることを提案し、学長も賛成してくれた。

目的明確化の観点から、学校全体の大きな問題という認識を各教職員に知ってもらうために、このプロジェクトチームを発足した目的を掲示板等で周知し、各教職員からも意見を募った。

しかし、進めていくが、なかなか具体的な案が出てこない。そこで、学務課職員Aは学生目線から良いアイディアが出るのではないかと考え、プロジェクトチームに学友会の学生や各学年の学年委員をチームに交えて遂行していった。

そこで出たアイディアは、同じ出身地の教員を含めた県人会を開催すること（教員を含め、学年を超えた学生が集まり、コミュニケーションをはかる会）。そして、大学内のみならず、学生が住むアパートの住民など地域周辺との交流を促進しくための、地域の行事へ参加する企画など、教職員及び学生そして、地域住民を含め、解決していった。

【教材の作成企図】

大学が抱える学生の悩み、特に「学生生活」に関する話題をとりあげ、個人の悩みを解決していく事をとおして、同じ悩みを抱える学生を支援するための総合的な支援施策を大学内で検討し考えることができるように教材を作成した。

その中では、学生支援に対する目標を共有、明確化し、協力し合い、課題を改善、解決していく方法を、教職員、学生、地域住民等を通して、チームワークを持って検討していく事が大切だということを理解してもらいたい。そのための支援の方法を、教材を通じて対話を深めていって欲しいと考える。

◎チーム九州好き

【チーム九州好きが考えたストーリー】

HPの作成に行き詰ったあなたは、T課長のアドバイスを受け、大学HPを担当している広報担当のAさんにまず相談し、HPで情報発信する際の注意点などの話を聞けた。他の部署にも意見を聞いてみたいという気持ちが出てきたため、入試担当、授業料免除・奨学金担当、学生生活支援担当といった人たちにも相談し、どのような情報があるか情報収集した結果、自分では考え付かなかった思いがけない要望や、組織の縦割りから生まれてくる問題点も出てきた。そこで職員だけではなく学生の視点からの意見を聞いてみようと思い付く。早速、よく事務室に来る学生に声を掛け、色々と話を聞いてみると、入学の際にどのような情報が欲しいのかということがよくわかった。

様々な部署の職員と学生から話を聞いたあなたは、それぞれが希望するHPの内容に微妙なズレが起こっていることを感じる。また、大学と言っても意外と学生と接する機会が少ない部署が多く、学生の意見を取り入れる機会が少ないことが分かった。自分の立場を優先させて仕事をするのではなく、時には立場を変えた視点や思考を持って仕事に当たる必要があること、目標を明確に設定し、部署を越えて協働で仕事をすればより良い結果が生まれること、人と人の繋がりを大切にすることの必要性に気付き、「大学が学生や保護者に知って欲しい情報」と「学生や保護者が知りたい情報」を整理し、調和を保ちながら、HPの作成にこぎつけることが出来た。

【教材の作成企図】

教員、職員、技術職員など色々な立場の人が業務に携わっており、普段何気なく行っている業務でも、実際はいろいろ影響し合っていることを理解すること、特に新規の課題に取り組む際は、閉じた空間で物事を考えるのではなく、関連する部署の担当者から情報を収集し、意見交換する等協働して取り組む姿勢が大切であること。

【教材を通じて対話で深めてほしいポイント】

・自分一人で出来ることに限界を感じたときに、どのような手段・方法で、仕事を完結していくのかを考えて欲しい。
・大学や社会の動向などの情報を、受身的に聞くだけではなく、積極的に自分から収集する姿勢や、職場内でも共有できる環境を構築する必要があることを知って欲しい。

◎チームおつまみ

【チームおつまみが考えたストーリー】

試行錯誤しながら、大学内外のいろいろな人に頼ってみたところ、少しずつ解決の糸口が見えてきました。

JICAのプロジェクト受託やプロジェクト運営のためのノウハウを民間のコンサルタント会社が持っていることが分かり、問題となっていた現地での運営（予算執行等）は、コンサルタント会社が全面的にバックアップしてくれることになりました。そのコンサルタント会社との打合せを重ねるうちに、現地での具体的な運営のイメージを作る必要性があると感じ、教員Ｂと一緒に現地の視察を行いました。

また、コンサルタントとの共同でのプロジェクト実施については、産学連携の部署にいる元同僚に聞いてみたところ、共同研究等で蓄積されたノウハウ等があることが分かり、自分のプロジェクトにも活用できる部分があることに気付きました。海外でのプロジェクト実施に関する学内的な調整（庶務系や財務系との調整）についても、上司と一緒に関係部署を回って、なんとか進みそうです。

さらに、国立大学法人主催の講演会で知り合ったＣ大学の職員が、以前Ｃ大学のカンボジア事務所に勤務していたことを思い出し、連絡を取ってみると、色々とカンボジア情勢について話してくれることになり、プロジェクト実施に向けて、大きく進展しそうです。

現地視察で調査してきた結果を元に具体的な予算を割り出し、教員Ｂと共に、当初の目的である企画書を作り上げることができました。

【教材の作成企図】

チーム内で見出された「活力の源泉」を盛り込んだ作品にしています。「模範となる存在」、「自由な発想」、「組織」、「視点の転換」などを踏まえ、ただ目的を達成するのではなく、それまでの経過や成果を「次に繋げる」ことを大きなテーマとしました。

【教材を通じて対話で深めてほしいポイント】

大学業務においては、似たような事案があるかもしれませんが、あらゆる視点や色々な発想で物事を考え、目的達成に向けて突破口を模索した結果、良い成果が得られたというストーリーとなっています。

この事案には、おそらく色々な切り口があると思いますし、もしかしたら意外な落とし穴があって成功しないかもしれませんので、その点で、私達が気づかなかったことに気づいてもらえればありがたいと思います。

キーワードで「コラボレーション」を挙げていますので、「どんなコラボができるか?」について、色々なアイディアを基に、目的達成へ向けた取組みを考えていただければ、このストーリーをさらに深めることができると思います。

◎チームがんばろう日本

【チームがんばろう日本が考えたストーリー】

あなたが異動したことにより、学務経験者が庶務担当に配属となりました。ある一つの事業を進めていくには、庶務部門と学務部門の連携が重要ということが身にしみて分かっているあなたは、まず学内の業務フローを改善し、各部門を交えて調整ができるように整備しました。

また、補助事業に向けた取り組みに教員間の温度差を感じたあなたは、意欲的な教員を見つけ出し、職員と教員の架け橋となる仲介役として、この補助事業に巻き込むような仕組みを考えました。意欲的な教員が関わることで、学務部門にも、教員との調整が必要であるという認識が生まれ、双方向の調整を行う機会が増えました。これで学務部門と庶務部門、学務部門と教員の連携のラインができ統一の目標に進む体制が出来上がりました。

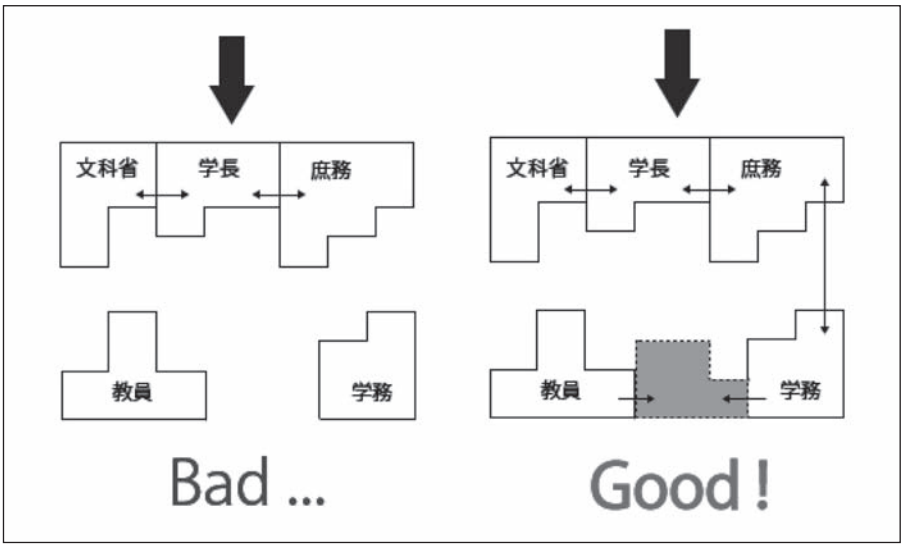
これにより、機器の運用や操作方法について実際に操作する教員側の疑問点が伝わって来ました。そこで、まず機器の操作運用に関しては、教員側の意見が反映された取扱説明書が学務部門により作成され、誰でも操作できるようにしました。マイクに関しては、学務部門と庶務部門が話し合い、混線しない最新のマイクを施設整備補助金に申請し外部資金を獲得して改修することとしました。機器の運用がスムーズになったことで、テレビ会議システムによる連携校との会議や、手始めに実施していた遠隔配信授業も徐々に軌道にのりはじめます。現場の教員の不満も解消されてきたので、核となるカリキュラム（シラバス等）整備についての具体的なアイデアも発案されるようになり、連携校の教員と職員を交えたワーキンググループが組織されました。

【教材作成の企図】

・庶務部門と学務担当事務職員との連携。
・計画立案を行う教員と講義担当教員との連携。
・事務部門と教員との連携。

【「突然知らないプロプラムの運営業務が降ってきた!」を避けるために】

補助金事業等の文書はまず庶務部門に配付されます。それを受け、庶務担当者は、学長等々に「こんな通知がきましたが申請しますか?」と相談に行きます。この流れで学長指示がいろいろ出され、庶務担当者がそのまま動くといったフローになっていました。この関与者が限定されている状況と申請までの流れに問題があると気付くことで、まず、庶務担当者から関係のある学務等の現場各所に話しを振り、それぞれに計画をたてさせた上で、これをもとにして庶務担当者も交えた打ち合わせを行い、最終的に庶務部門が申請するといったフローへと改善しました。



■参加者の声

➢Q-Linksのプロジェクトへ初めての参加でしたが、進行係の皆様のきめ細やかな実施体制に、プロジェクトでの最大限の成果を見出せるような工夫を感じ、大変感謝しています。肯定的な雰囲気の中での各Stepは、参加者が一体になる雰囲気（安心感・信頼感）が感じられました。成果物を仕上げる過程において、大学人としての向き合いかた、組織として取り組むための姿勢を学ぶことができました。今後の業務に生かせるように努力を怠らないようにしたいと思います。本当にありがとうございました。【私立大・職員】

➢Q-Labでの経験をふりかえってみて、学生時代に指導教員から「他大学のひとと交わって、互いに自分の研究のことだけでなく日頃の愚痴や指導教員のあれやこれやを言い合って、発散して、活性化して、また明日からも頑張ろうって思って帰ってくる、といったことをできるような場や機会は大事なんだぞ!」と何度となく言われていたことを思い出しました。教員としてのスタートを切り、大人になればなるほど、こうした場を持つことが難しくなるような気がしていた、ちょうどその時に、Q-Labで出会いと経験と発散の場を得ることができました。Q-Labを通して交流を深めた方と、互いに大学訪問を実現するなど、その効果は帰ってからも持続しています。【国立大・教員】

■企画・統括者のコメント（Q-Links事務局　田中 岳）

あらためて、御参加いただいた皆様に感謝を申し上げます。ありがとうございました。今回のQ-Lab OD（Organizational Development: 組織開発）プロジェクトでは、初挑戦!するアクティビティも多く、強いエネルギーが求められました。いやぁ、疲れました・笑。参加の皆さんに「活力」を考えていただくのですから、当然と言えば当然。『先ず隗より始めよ』です。“初めて”は、人を緊張させたり不安にさせたりするものです。とはいえ、勇気や元気に気づかせてくれるものでもあります。最初から熟達している者はいません。初学者の強みを活かして、健やかに前へ進んでいきましょう!

Q-Lab 第３回 OD プロジェクト

Kyushu Learning Improvement Network for Staff Members in Higher Education

■企画概要

これまでのQ-Lab ODプロジェクトでは、大学における『対立』や『活力』がテーマでした。今回は、少し趣向を変えて、「会議」がテーマです。大学を取り巻く様々な課題へ組織的に取り組もうとすれば、避けては通れないのが会議でしょう。「とても有意義だった！もっと語り合いたい！」と感じられる会議もあれば、「時間の無駄だった。もう二度と出たくない。」ということもあります。そうした差は、どこからくるのでしょうか。「価値ある会議づくり」についてQ-Linksメンバーシップと大いに語らい、解決のアイデアを創出していくことを目指します。

●テーマ

「さぁ語り合おう！－価値ある会議づくりを探る－」

●日時

2012年08月30日（木）　10:30 ～21:30
　　08月31日（金）　09:30 ～16:00

●会場

佐賀県唐津市　国民宿舎虹の松原ホテル

●募集対象

Q-Linksメンバーシップ（賛同校・運営校の教職員、賛同者に限る）

●参加者数（大学）

９大学16名（教員５名／職員11名）
（鹿児島大学、九州大学、佐賀大学、筑紫女学園大学、福岡教育大学、福岡歯科大学、
賛同者［福島大学、名城大学、立教大学］）

●チーム分け

所属大学の規模や設置形態、教職員の職制が多様になるように振り分けた、４つのチームによるチーム活動を基本に進めました。

・チームおさるさん（九州大学、筑紫女学園大学、福岡教育大学）
・チームがばいレインボー（九州大学、佐賀大学、福岡歯科大学、福島大学）
・チームドラゴン（九州大学、名城大学、立教大学）
・チームYAME TEA（鹿児島大学、九州大学、福岡歯科大学）
※チーム名はメンバーによる命名

●ファシリテーター

田中岳（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　准教授）

●プログラム

1日目	09:30 － 受付開始	
	10:30 － 開会式＆オリエンテーション	
	10:50 － アクティビティ（ミラーリング）	Step1 理解する
	11:20 － ダイアログ①	
	11:50 － 昼食	
	13:00 － アクティビティ（フィッシュボウル）	Step2 解明する
	13:45 － ダイアログ②	
	14:10 － 休憩	
	14:30 － アクティビティ（ムービー）	
	16:15 － ダイアログ③	
	16:45 － アクティビティ（ソロウォーク）	
	17:15 － アクティビティ（ライティング）	
	17:40 － 夕食	
	19:50 － ダイアログ④ LABO BAR（ラボバー）	
	－ 21:30 1日目終了	
2日目	09:30 － 集合	Step3 解決する
	10:00 － ダイアログ⑤	
	10:30 － ダイアログ⑥＆アクティビティ（マンダラート）	
	12:15 － 昼食	
	13:35 － アクティビティ（ライティング）	
	14:00 － ダイアログ⑦＆アクティビティ（エンパシーサークル）	
	15:00 － 休憩	
	15:10 － 全体ふりかえり（ファシリテーショングラフィック）	
	15:50 － 閉会式	
	－ 16:15 終了・解散	

■当日の様子（内容）

●Step1　理解する「実際に行われている会議の課題を認識し共有する場」

本ODプロジェクトのコンセプト（アイディアの素）と全体デザインを案内するオリエンテーションに続いて、参加者のチーム分け。そして、「チーム・メンバー」「対話の技法（役割）」について参加者が理解するためのウォームアップを行いました。その後、チーム・メンバーの事例（会議の失敗や成功など）を共有。

Step1の中心は、対話（ダイアログ）を通じて自大学における会議を省察することにありました。いわば“会議観”に気づくことが眼目だったといえるでしょう。

●Step 2　解明する「会議で起きているパターンを探求し、自分の影響についても再確認する場」

午後は、会議を“診て”対話することが活動の核。

先ずは、実際の会議を再現。フィッシュボウルというアクティビティを通じて模擬会議に挑戦！妙にリアルな演じ手たちの演技に、観察サイドも苦笑い。いったい会議では何が起きているのでしょうか。そのプロセスに注目し体験を分かち合う対話（ダイアローグ）を終えて、映画鑑賞へ。「法廷もの」として有名な作品は、参加者にどんな気づきをもたらしたのでしょうか。映画で繰り広げられた審議の様子を分析・共有することで、チーム・メンバーの発見を学習へと高める対話（ダイアローグ）を行いました。

Step2では、ある種の“混乱”が意図されていました。会議に対する先入観を疑ってみることで、豊かな発想への助走としたかったからです。ですので、会議を“診て”対話する、チームが主体となったアクティビティを終えた後には、ソロウォークやライティングに力点を置いたパーソナルワークを行いました。チームから離れて、じっくり自分と向き合う時間が準備されていたのです。

夕食後は、OST（オープン・スペース・テクノロジー）にヒントを得た対話（ダイアローグ）の時間を持ちました。名付けて『LABO BAR』。全体テーマである「会議」からも離れ、波音をかすかに聞きながら、翌日に向けてリラックスしながらも真剣な夜が更けていきました。

●Step 3　解決する「会議づくりのアイディアを評価し、これからのコミットメントを高める場」

今も心と頭に残っていることについて対話（ダイアローグ）するところからのスタート。チームのメンバーが自分の学びを披露することで、新たな学びを得るといった“学びへの貢献”が行われました。その後には、マンダラートというアクティビティを通じて、課題解決の糸口や方略・方法を発想し共有するチーム・ワークが展開。とにかくアイディアを出し尽くすことを目標に、シートのマス目を埋めていきました。

昼食後は、アイディアを整理するライティングに続き、参加者がチーム・メンバーの協力を得て、価値ある会議の実現に向けた決意を高める時間を持ちました。先ずは「小さな成功（アーリー・サクセス）」を実現するために、チームの仲間は、どんな「ワード」を送ったのでしょうか。神妙な時間が過ぎていきます。

最後は、全員が円に座り直しての振り返りの時間。紡ぎ出される言葉が、ファシリテーション・グラフィックにまとめられていきました。

■参加者の声

➢2日間実に楽しかったし、幸せな気分に包まれてプロジェクトを終えることができた。濃密な思考運動とリフレッシュとの緩急がまたよかった。

参加者の半分がロールプレイの観察者、もう半分が演技者に分かれて会議を疑似体験するワークでは、私は演技者になり教員を選んで演じてみた。お芝居だと頭では分かっていても、即興で演じると自分自身や共演者の反応が非常に新鮮で面白かった。こんなふうに「会議」を観察したことはなかった。

ソロウォークも興味深かった。一人で歩くと、波の音も相まって頭の中で考えがぐるんぐるんと浮かんでは消える。「整理したいが、そうすると消えてしまうような新しい発想の何か」を忘れたくなくて、今も私の机の引き出しには唐津の浜辺で拾った白い貝殻が2つある。「何か」は、まだ私の中で結晶化していないが、このプロジェクトへの参加によって自分なりに「得たもの」があるのは事実だ。【私立大・職員】

➢初めてのQ-Lab。初めての合宿型研修。初めての佐賀県唐津。とにかく「初めて」づくしだったもので、博多から移動するバスの車中では緊張しきりでした。ところが、いざ研修が始まると、Q-Linksのスタッフや参加者の皆さんが生み出す和やかな雰囲気のおかげで、いつの間にかリラックスしている自分がいました。

また、「価値ある会議づくりを探る」というテーマに関してはもちろん、教職員向けの研修や授業を効果的に進めていくためのヒントも沢山いただくことができました。マンダラートやフィッシュボウルなどの手法から、お酒を嗜みつつざっくばらんな意見交換を行うLABO BARのような仕掛けなど、至るところにアイデアが散りばめられていたことが印象的でした。身も心も普段着のまま参加できるQ-Labを、是非、一度は体験してみてください！【私立大・教員】

■企画・統括者のコメント（Q-Links事務局　田中 岳）

あらためて、御参加いただいた皆様に感謝を申し上げます。ありがとうございました。趣向を変えて「会議」をテーマとしたのは、ある本との出会いからです。『会議のリーダーが知っておくべき10の原則』（2012年、英治出版）。

このアプローチであれば、これまでに培ってきたQ-Linksのノウハウを応用できるかもしれない。立ち読みの時に、すでに企画が頭の中を駆け巡りました（もちろん購入もしましたが…）。さて実際には（Q-Labの内容も、現場に戻ってからも！）いかがだったでしょうか。また御意見を寄せていただければ幸いです。次回に向けた、検討“会議”をはじめましょう！笑

Q-Lab CD（Curriculum Development: カリキュラム開発）プロジェクト

Kyushu Learning Improvement Network for Staff Members in Higher Education

■CDプロジェクトとは

複雑かつ急速に変化する環境のもと、大学教育の中心であるカリキュラムでも、学習成果の測定やカリキュラムマップ、単位の実質化など、多くの課題が浮上してきています。さらにこれらの課題には、教育理念・目標と実践活動の調整や教育活動の財政マネジメントなど、より大きな枠組みで考えなくてはならない改革の要素も含まれています。CDプロジェクトでは、教育活動におけるカリキュラムの意義や関連する政策動向などの知見を学ぶことに加え、カリキュラムマネジメントにおける実践的な課題について、Q-Linksメンバーシップによって解決のアイデアを創出していくことを目指し、過去3年間計5回にわたり延べ79名の教職員が集いました。

なお、各回のプロジェクトは、長期型（1ヶ月～3ヶ月）と短期型（翌年8月）で一つのセットになっており、同一のテーマで開催。例えば第1回・第2回は「カリキュラムに影響を与えているものは何か?」をテーマにカリキュラム制度に焦点を当て、第3回・第4回は「うまくまわっているカリキュラムはココが違う!」をテーマにカリキュラムマネジメントについて深めていきました。なお、カリキュラム評価をベースにした第5回「カリキュラムをリデザインする時の着眼点と根拠を探せ!」に限っては長期型のみの開催となりました。

各回のプロジェクトでは長期型、短期型を問わず、「Step1: 知る」→「Step2: 探る」→「Step3: 創る」の3つのステップによって構成されています。この3つのステップは、参加メンバー同士の出会いから、新たなアイデアの創出までのプロセスを、よりスムーズに経験できるよう、段階的に計画されました。

それでは、2012年度に開催した第4回、第5回のCDプロジェクトについて、実際の会場において、対話を通した学び合いの様子がどのようになされてきたか、以下の通り報告します。

Q-Lab 第4回 CD プロジェクト

Kyushu Learning Improvement Network for Staff Members in Higher Education

■開催概要

1年前の2011年8月、第2回CDプロジェクトとして、佐賀県唐津の地で開催した初めてのQ-Lab合宿。凝縮された空間と時間の中で深い学び合いが展開され、参加者の満足度も高く、大好評でした。

Q-Labの合宿は、情報を得ることを目的に集うのではなく、参加者一人一人がプログラムに積極的に参画することで、新たなアイデアの創造を目指していくという特徴があります。

第4回CD（Curriculum Development: カリキュラム開発）プロジェクトは、第3回（2011年秋開催）からテーマを引き継ぎながらもメンバーを一新し、カリキュラムマネジメントが成功している時、そこでは何が起きているか、違いはどのようにして生まれるのかを皆で深めていきました。

●テーマ

「うまくまわっているカリキュラムはココが違う!」

●日時

2012年08月27日（月）　10:30 ～22:00

08月28日（火）　09:20 ～16:00

●場所

佐賀県唐津市　国民宿舎虹の松原ホテル

●募集対象

Q-Linksメンバーシップ（賛同校・運営校の教職員、賛同者に限る）

●参加者数（大学）

6大学10名（教員3名/ 職員7名）

（鹿児島大学、九州国際大学、九州大学、中村学園大学、福岡教育大学、福岡歯科大学）

●チーム分け

所属大学の規模や設置形態、教職員の職制が多様になるように振り分けた、3つのチームによるチーム活動を基本に進めました。

・チームKISS（鹿児島大学、九州大学、福岡歯科大学）

・チームSHUN（九州国際大学、九州大学、中村学園大学、福岡教育大学）

・チームSUK（九州大学、中村学園大学）

※チーム名はメンバーによる命名

●ファシリテーター

小貫有紀子（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）

田中　　岳（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　准教授）

●プログラム

1日目	09:30 －　受付開始	
	10:30 －　開会式 & オリエンテーション	
	10:50 －　ウォームアップ	
	11:20 －　昼食	
	12:30 －　ストーリーセッション	Step1 知る
	14:15 －　アクティビティ（マシュマロチャレンジ）	
	15:00 －　休憩	
	15:20 －　ダイアログ①	Step2 探る
	16:30 －　アクティビティ（ソロウォーク）	
	17:30 －　LABO Bar（ラボバー）オリエンテーション	
	17:40 －　夕食	
	20:00 －　LABO BAR（ラボバー）	
	－ 22:00　1日目終了	
2日目	09:20 －　集合	
	10:05 －　ダイアログ② & アクティビティ（TWO ROPES）	
	11:00 －　アクティビティ（レゴワーク）	Step3 創る
	12:10 －　昼食	
	13:35 －　プレゼン & レビュー	
	15:05 －　全体のふりかえり（ファシリテーショングラフィック）	
	15:40 －　閉会式	
	－ 16:00　終了・解散	

■当日の様子（内容）

参加者には事前に、会場の雰囲気やプログラム内容、そして準備内容等を記した「Q-Lab第４回CDプロジェクトしおり」を配布しました。今回はほとんどが初めてCDプロジェクトに参加するメンバーだったこともあり、受付ではやや堅い面持ちでしたが、前日入りしたスタッフが丹精を込めて準備した会場設営を一目見て「うわぁ!」と歓声が上がるなど、期待感が徐々に会場に満たされていきました。

開会式では２日間のプログラム内容や、プロジェクト全体の目標、グランドルールの説明がありました。会場の窓からみえる風景は一面の海。海水浴で楽しむ子供の声も響く中、リラックスした雰囲気で第４回CDプロジェクトがスタートしました。

●第１日目

・Step1　知る「共通の基盤をつくる」

・Step2　探る「カリキュラム開発の本質をさぐる」　前半

オリエンテーションでチームメンバーとの親睦を深めた後、午後からは「ストーリーセッション」。第３回CDプロジェクトで起きたこと・生み出されたことについてチームメンバーと共有し、カリキュラムマネジメントの課題について対話をしました。続いては、チームビルディングについて学ぶアクティビティ（ゲーム）に挑戦。ゲーム後の振り返りでは、カリキュラムマネジメントについての対話を深めていきました。その後、夕日を見ながらの「ソロウォーク」では、一人ひとり静かな思索の時間を過ごしました。

夕食後の「LABO BAR」では、ファシリテーターとして立候補した３人のメンバーが、語り合いたいテーマをもとに参加者を募りました。3つのグループに分かれ、夜が更けていく中、終了時間ギリギリまで熱い語り合いは続きました。

●第２日目

・Step2　探る「カリキュラム開発の本質をさぐる」　後半

・Step3　創る「明日への一手を明確にする」

朝９時30分、集合時間に集まってきたメンバーは、まずラジオ体操で体ほぐし。その後、昨日の「LABO BAR」で話したことを全体で共有していきました。続いて、カリキュラムマネジメントの現状と未来像についてのダイアログの時間。会場に設置された２本のロープの上で、自分の現状と未来像に向き合いました。続くレゴブロックを使ったアクティビティでは、カリキュラムマネジメントについて自分の考えを作品として表現し、他のチームとも披露し合いながら深め合っていきました。

そしていよいよ、最後のチームダイアログ（対話）の時間。明日からできることを一人一人がチームメンバーにプレゼンし、メンバーがメッセージを送りました。閉会式では、全体で円座に。２日間を通じての思いを溢れるままに語っていきました。

■参加者の声（アンケートより抜粋）

➢「カリキュラム」というテーマにとらわれすぎず、チームのみなさんのいろいろな意見を聞けて、終始良い雰囲気で、楽しく過ごせました。モチベーションの高いメンバーにたくさん刺激を受け、普段の私はこんなんでいいのかな？と改めて考えさせられました。研修中一貫して「常に前向きなアドバイス・コメントを言う」という、普段やりたくてもなかなかできていないことを意識して実践することは、すごく頭も使い、とても良い経験になりました。

➢普段考えもしないことや知らなかったことに真剣に取り組める時間が十分にあるのが合宿の良さだと思い、参加して良かったです。ただ意見を言うだけじゃなくて、遊びを通して、気付いたらゴールにたどり着いているというやり方が子どもに戻ったようでおもしろかったです。他の人の話を聞いていると、自分の思考の反省点が見えてきて、対話ってとてもよいものだと思いました。

■企画・統括者のコメント（Q-Links事務局　小貫 有紀子）

2度目の合宿ということもあり、自分自身、前回よりもスムーズに準備、進行に向かえたのではないかと思います。とはいえ、プロジェクトのテーマもメンバーも前回とは異なるため、やっぱり本音では大変でした。細かなところでは「あそこをこうすれば良かったかな」と反省することも多かったですが、合宿ならではの凝縮された空間と時間を再び経験できたこと、そのものが大きな財産です。

全く新しいワークにもチャレンジできたことや、段取りのスムーズ化等、Q-Linksとしてこの2日間で得るものも大きかったと思います。夏期休業期間中とはいえ、多用な中メンバーを送り出してくださったそれぞれの機関のご同僚や上司の皆さんに心から御礼申し上げます。

Q-Lab 第５回 CD プロジェクト

Kyushu Learning Improvement Network for Staff Members in Higher Education

■企画概要

近年、学士課程教育の質保証の流れの中で、学生の成長に貢献するカリキュラムへの転換が求められています。皆さんだったらカリキュラムの見直しについて、何を拠り所にして周りを説得しますか？そもそも、現行のカリキュラムのきちんと機能している、もしくは変えなくてはいけない点は、どうチェックしていけば良いのでしょうか？

CDプロジェクトの一つの区切りとなる今回は、「着眼点」と「根拠」に焦点を当て、対話型ワークショップを中心に、カリキュラム評価の本質を探っていきました。

●テーマ

「カリキュラムをリデザインする時の着眼点と根拠を探せ！」

●日時

Step1　2012年11月02日（金）　10:30 ～17:30
Step2　2012年11月03日（土）　10:30 ～17:00
Step3　2012年12月07日（金）　12:30 ～17:30

●会場

九州大学伊都キャンパス

●募集対象

Q-Linksメンバーシップのうち、「教育改革の企画・立案に中心的な立場にいる教職員」「カリキュラムマネジメントに関わっている、または関心がある教職員」「実質的に大学における教学を実施運営している、または関心がある教職員」などを想定し、募集を行いました。また、本プロジェクトでの修得内容をより効果的に活用・実践するために、個々の組織単位（賛同校）で教員と職員が一緒に参加することを奨励しました。

●参加者数（大学）

８大学１機関11名（教員４名 / 職員７名）　※教職員ペアでの参加は１大学。
（九州産業大学、九州大学、崇城大学、大学コンソーシアム京都、筑紫女学園大学、中村学園大学、
福岡教育大学、福岡女子大学、福岡大学）

●チーム分け

所属大学の規模や設置形態、教職員の職制が多様になるように振り分けた、３つのチームによるチーム活動を基本に進めました。

・チームくりむぞん（九州大学、九州産業大学、大学コンソーシアム京都、福岡大学）
・チームO.K.（崇城大学、福岡教育大学、福岡女子大学）
・チーム秋ですね（九州大学、崇城大学、筑紫女学園大学、中村学園大学）
※チーム名はメンバーによる命名

●プログラム概要

Step1　知る	ゲストスピーカーからの話題提供を踏まえ、メンバーが相互にアイデアを広げていくことで、プロジェクトの共通基盤をつくっていきました。
Step2　探る	ダイアログ（対話）を基本に、メンバーが互いにアイデアを出し合うことを通じて、カリキュラム評価の実践における課題について、その特質を深めていきました。
Step2終了後は引き続き、Q-pantry（参加者専用の電子掲示板）を用いて、チームごとに成果物の作成、Step3の発表準備を行いました。	
Step3　創る	チームの成果発表と、他のメンバーからのフィードバックにより、アイデアをよりブラッシュアップするとともに、全体での共有知化を図りました。また終了後は当日、他のメンバーと行った「フィードバック・ダイアログ」の内容をもとに、成果報告書を提出しました。

■Step1　知る

●日時

2012年11月02日（金）　10:30 ～17:30　　※終了後、懇親会

●会場

九州大学伊都キャンパス　伊都ゲストハウス多目的ホール

九州大学伊都キャンパス　センター1号館3F1302教室

●話題提供者

鳥居朋子（立命館大学 教育開発推進機構　教授）

福田　聡（関西大学 入試センター入試広報グループ　課長）

●ファシリテーター

小貫有紀子（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）

田中　　岳（Q-Links事務局／九州大学 基幹教育院　准教授）

●プログラム

09:30－10:30	開場・受付
10:30－11:20	オリエンテーション（開会、Q－Lab の説明、チーム分け、自己紹介、話題提供の紹介）
11:20－13:00	昼食休憩
13:00－15:50	話題提供、相互インタビュー ※
15:50－16:00	休憩
16:00－16:30	チーム・ブリーフィング（話題提供の振り返り）
16:30－17:25	Q&Aセッション（ゲストとの対話）
17:25－17:30	オリエンテーション（Step2の説明、閉会）
18:30－	懇親会

※Step1の話題提供の時間は、「九州大学教育改革研究会」として、参加者以外の高等教育関係者にも広く開放されました。

●当日の様子（内容）

オリエンテーションにて第５回CDプロジェクトの目標を確認した後、チーム分けと自己紹介。メンバー間の親睦を深めました。

続いて、ゲストから話題提供の時間。「カリキュラムにおける評価の現状と課題」をテーマに、自大学での取り組みを中心にカリキュラム開発におけるデータの活用法を始め、「教育活動の成果をどのように見せていくか」、「活用するためのデータのあり方とは」等、日常の教育活動の様々な場面を例に挙げながら、話をしていただきました。

その後は、ゲストを囲んでのＱ＆Ａセッション。次々に沢山の質問の手が挙がり、最後は時間が足りなくなるなど会場は熱気に包まれました。

■Step2　探る

●日時

2012年11月03日（土）　10:30 ～17:00

●会場

九州大学伊都キャンパス　伊都ゲストハウス多目的ホール

●ファシリテーター

小貫有紀子（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）

田中　　岳（Q-Links事務局／九州大学 基幹教育院　准教授）

●プログラム

09:30－10:30	開場・受付
10:30－11:00	オリエンテーション（Step2の説明、チェックイン）
11:00－11:40	アクティビティ
11:40－12:50	昼食休憩
12:50－13:05	ダイアログ①
13:05－13:30	アクティビティ
13:30－13:45	ダイアログ②
13:45－15:10	アクティビティ
15:10－15:35	休憩
15:35－16:15	アクティビティ
16:15－16:25	オリエンテーション（Step3の説明）
16:25－16:40	チーム・ミーティング
16:40－16:50	オリエンテーション（チェックアウト）
16:50－17:00	閉会

●当日の様子（内容）

Step2では、丸一日かけてチーム学習を中心に行われました。

午前中はダイアログ（対話）を深めるためのアクティビティ（ワーク）に挑戦。午後からは、評価や理想のカリキュラム像についてダイアログを行い、チームで共有しました。ダイアログを深めた後は、アクティビティに取り組み、カリキュラムの未来形についてチームでアイデアを出し合っていきました。その後、成果を他のチームに披露しフィードバックを互いに行う中で、カリキュラムについてさらに深め合っていきました。

■Step3　創る

●日時

2012年12月07日（金）　12:30～17:30

●会場

九州大学伊都キャンパス　伊都ゲストハウス多目的ホール

●ファシリテーター

小貫有紀子（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）

●プログラム

12:00－12:30	開場・受付
12:30－13:00	オリエンテーション（開会、Step3の説明、チェックイン）
13:00－15:40	セッション＆レビュー 1.チームくりむぞん 2.チームO.K. 3.チーム秋ですね
15:40－15:50	休憩
15:50－16:40	ふりかえり1（参加者全員で）
16:40－16:55	ふりかえり2（機関毎に）
16:55－17:30	修了式（閉会式）

●当日の様子（内容）

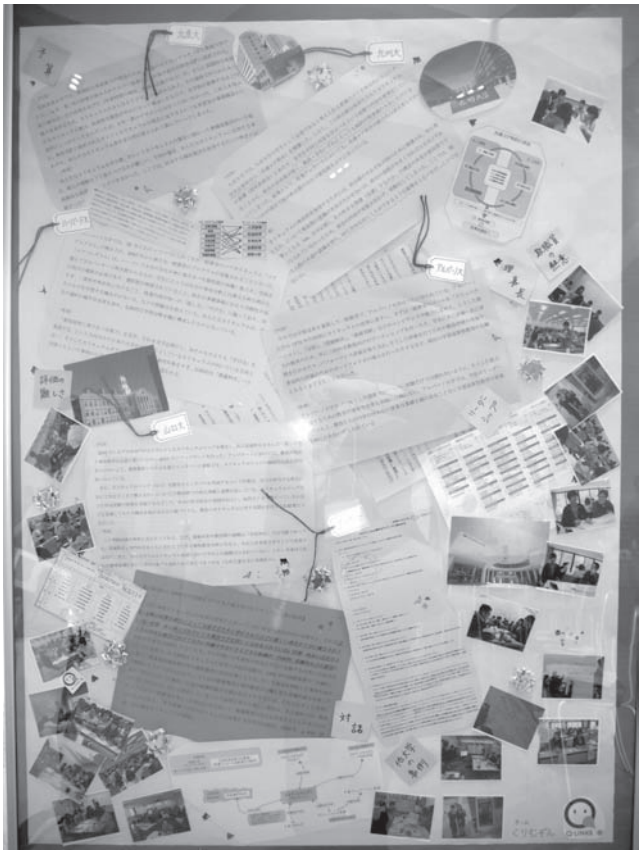
Step1・Step2から約1か月間かけてチームで取り組んだ成果を模造紙1枚にまとめ、プレゼンテーションを行いました。

どのチームも工夫を凝らした成果物を前に、緊張しながらも、チーム内で語り合ってきた内容を堂々と発表していました。中には、コラージュや折り紙を使った成果物も。発表後は、チームの成果物をよりブラッシュアップしていくためのフィードバックを行いました。

最後は、全員で円座になり、全課程を振り返り、第5回CDプロジェクトの体験を分かち合いました。

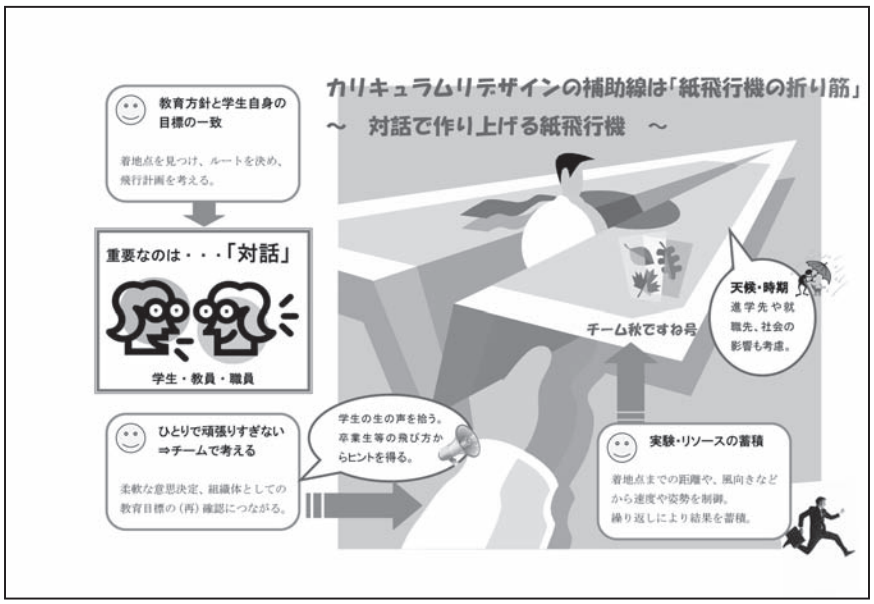
■成果物

1. チームくりむぞん：「カリキュラム・リデザインの補助線～事例集めから見えてきたもの～」



2. チームO.K.：「北が上じゃないとダメ？」

3. チーム秋ですね：「カリキュラムリデザインの補助線は「紙飛行機の折り筋」 ～対話で作り上げる紙飛行機～」



■参加者の声（成果報告書より一部抜粋）

➢カリキュラムをリデザインするとき、既にカリキュラムが動いているゆえに、様々な立場の人が様々な理由で様々主張をすると思います。100%同じヴィジョンは共有できないとしても、できる限り近づける必要があり、その手法として「対話」がとても有効であると感じました。【公立大・職員】

➢勢いと、その場の雰囲気に何かしら「得た」ものがあった気になっていたが、日常に戻ると日を追うごとにぼやけてくる。その中で、あの壮大なテーマについて自由に表現せよと言われても、何をどう形作ればよいのかわからない。でも今振り返ると、この間の思考経験が一番自分の糧になったと思う。【私立大・職員】

➢お互いの違いを認め合い、まず相手の話を最後まで聞くということを心掛けることで、所属、立場、年齢、経験や知識が異なる初対面の４名のチームが対話を重ねて一つの課題に対してこれほどまで前向きに取り組めるという体験は、とても貴重であり、とくに、多くの志の高い方々に出会えたのは何よりの収穫でした。【私立大・教員】

■企画・統括者のコメント（Q-Links事務局　小貫 有紀子）

九州大学の新キャンパス（伊都キャンパス）での開催となった第５回CDプロジェクト。長期型のプロジェクトでは初めて博多駅からの直行バスも運行させ、木の香りあふれる新築の建物での開催となりました。また教育改革の流れの中でともすると圧力となり得る評価という難しいテーマを扱うため、今まで以上に３つのステップの一連の流れの整合性について、チェックを繰り返していったことを覚えています。

当日は、まず話題提供の内容が濃く、圧倒されました。翌日のワークショップの中でも、何度も話題提供の内容が話題になっていました。さらに約１ヶ月と短い期間でチームの成果物を作成するにあたり、Q-pantry上で盛んに議論が交わされました。こんなに利用される電子掲示板は、きっと他にはないと、心から思っています。皆さんのご協力により、充実したStep3のピアレビューに繋がりました。ありがとうございます。

当初計画していたCDプロジェクトの全５回を終え、実際の大学の現場に何か変化をもたらすことができたのだろうかと、自問しています。企画者側である私たちも、「評価」するに値する取組ができたのかどうか、しっかりとふりかえって行こうと思います。

History of Q-Lab

Kyushu Learning Improvement Network for Staff Members in Higher Education

■CDプロジェクト

●第１回

テーマ：カリキュラムに影響を与えているものは何か？
参加者：国私12大学25名（教員９名／職員16名）

＜Step1　大学カリキュラム論の課題＞
日時：2010年10月22日（金）　13:00 ～17:30
場所：九州大学箱崎キャンパス　21世紀交流プラザⅠ 2F講義室AB、1F多目的ホール
話題提供者：川嶋太津夫（神戸大学 大学教育推進機構　教授）
ファシリテーター：小貫有紀子（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）
　　田中　　岳（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　准教授）

＜Step2　カリキュラムづくりのコツを探る＞
日時：2010年11月13日（土）　12:30 ～17:30
場所：九州大学箱崎キャンパス　21世紀交流プラザII 2F講義室１
ファシリテーター：田中　　岳（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　准教授）
　　小貫有紀子（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）

＜Step3　カリキュラムづくりのコツを共有しよう！＞
日時：2010年12月03日（金）　12:30 ～17:30
場所：九州大学　西新プラザ2F大会議室
コメンテーター　：大場　　淳（広島大学 高等教育研究開発センター　准教授）
ファシリテーター：小貫有紀子（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）

●第2回

テーマ：カリキュラムに影響を与えているものは何か？
参加者：国公私12大学17名（教員6名／職員11名）
場　所：国民宿舎 虹の松原ホテル【佐賀】

＜Step1　知る＞＜Step2　探る＞
日時：2011年08月25日（木）　10:00 ～21:00
ファシリテーショングラフィック指導：滋賀壮史（NPO法人グリーンシティ福岡　理事）
ファシリテーター：小貫有紀子（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）
　　田中　　岳（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　准教授）
　　久保山　宏（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）

＜Step3　創る＞
日時：2011年08月26日（金）　09:00 ～16:00
ファシリテーター：小貫有紀子（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）
　　田中　　岳（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　准教授）

●第3回

テーマ：うまくまわっているカリキュラムはココが違う！
参加者：国私10大学16名（教員8名／職員8名）

＜Step1　カリキュラムマネジメントの現状と課題＞
日時：2011年10月21日（金）　12:30 ～17:30
場所：九州大学箱崎キャンパス　旧工学部本館3F第1会議室、数理書庫
話題提供者：沖清豪（早稲田大学 文学学術院　教授）
　　吉崎誠（関西外国語大学 事務局　次長）
ファシリテーター：小貫有紀子（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）
　　田中　　岳（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　准教授）
　　久保山　宏（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）

＜Step2　カリキュラムマネジメントの落とし穴！＞
日時：2011年11月12日（土）　12:30 ～17:30
場所：九州大学箱崎キャンパス　職員会館
ファシリテーター：小貫有紀子（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）
　　田中　　岳（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　准教授）

＜Step3　カリキュラムマネジメントの落とし穴！＞
日時：2011年12月09日（金）　12:30 ～17:30
場所：九州大学箱崎キャンパス　旧工学部本館3F第1会議室
ファシリテーター：小貫有紀子（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）
　　田中　　岳（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　准教授）

●第4回

テーマ：うまくまわっているカリキュラムはココが違う！
参加者：国私6大学10名（教員3名／職員7名）
場　所：国民宿舎 虹の松原ホテル【佐賀】

＜Step1　知る＞＜Step2　探る＞
日時：2012年08月27日（月）　10:30 ～22:00
ファシリテーター：小貫有紀子（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）
　　田中　　岳（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　准教授）

＜Step3　創る＞
日時：2012年08月28日（火）　09:20 ～16:00
ファシリテーター：小貫有紀子（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）
　　田中　　岳（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　准教授）

●第5回
テーマ：カリキュラムをリデザインする時の着眼点と根拠を探せ！
参加者：国公私7大学、1機関11名（教員4名／職員7名）

＜Step1　カリキュラム評価の現状と課題＞
日時：2012年11月02日（金）　10:30 ～17:30
場所：九州大学伊都キャンパス　伊都ゲストハウス多目的ホール、センター1号館3F1302教室
話題提供者：鳥居朋子（立命館大学 教育開発推進機構　教授）
　　福田　聡（関西大学 入試センター入試広報グループ　課長）
ファシリテーター：小貫有紀子（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）
　　田中　　岳（Q-Links事務局／九州大学 基幹教育院　准教授）

＜Step2　カリキュラム評価の要因を探る＞
日時：2012年11月03日（土）　10:30 ～17:00
場所：九州大学伊都キャンパス　伊都ゲストハウス多目的ホール
ファシリテーター：小貫有紀子（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）
　　田中　　岳（Q-Links事務局／九州大学 基幹教育院　准教授）

＜Step3　カリキュラム・リデザインの補助線＞
日時：2012年12月07日（金）　12:30 ～17:30
場所：九州大学伊都キャンパス　伊都ゲストハウス多目的ホール
ファシリテーター：小貫有紀子（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）

■ODプロジェクト
●第1回
テーマ：コンフリクト－対立と向き合う－
参加者：国私12大学20名（教員4名／職員16名）

＜Step1　コンフリクトを知り尽くす！？＞
日時：2011年07月22日（金）　10:00 ～18:00
場所：九州大学箱崎キャンパス　21世紀交流プラザⅠ 2F講義室AB、1F多目的ホール
話題提供者：木下冨雄（（財）国際高等研究所　フェロー、京都大学　名誉教授）
　　山崎その（京都外国語大学　学長事務室長）
ファシリテーター：久保山宏（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）
　　田中　岳（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　准教授）

＜Step2　コンフリクトを語り尽くす！？＞
日時：2011年07月23日（土）　10:30 ～17:00
場所：九州大学箱崎キャンパス　21世紀交流プラザⅠ 2F講義室AB
ファシリテーター：久保山宏（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）
　　田中　岳（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　准教授）

＜Step3　コンフリクトを味わい尽くす！？＞
日時：2011年09月09日（金）　13:00 ～18:00
場所：九州大学箱崎キャンパス　旧工学部本館3F第1会議室
ファシリテーター：久保山宏（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）

●第2回
テーマ：動き出す時－変革・チャンス・活力―
参加者：国公私10大学14名（教員2名／職員12名）

＜Step1　大学が何かをはじめる時＞
日時：2012年06月15日（金）　10:00 ～18:00
場所：九州大学箱崎キャンパス　21世紀交流プラザⅠ 1F多目的ホール、旧工学部本館3F第1会議室
話題提供者：井下　理（慶応義塾大学 総合政策学部　教授／大学院政策・メディア研究科委員）
　　樋口浩朗（山形大学 小白川キャンパス人文学部事務室　係長）
ファシリテーター：久保山宏（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）
　　田中　岳（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　准教授）

＜Step2　活力の源泉を考える＞
日時：2012年06月16日（土）　09:30 ～17:00
場所：九州大学箱崎キャンパス　21世紀交流プラザⅠ 1F多目的ホール
ファシリテーター：久保山宏（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　特任助教）
　　田中　岳（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　准教授）

＜Step3　活力を分かち合う＞
日時：2012年07月27日（金）　12:30 ～18:00
場所：九州大学箱崎キャンパス　旧工学部本館3F第1会議室
ファシリテーター：田中岳（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　准教授）

●第3回
テーマ：さぁ語り合おう！－価値ある会議づくりを探る－
参加者：国私9大学16名（教員5名／職員11名）
場　所：国民宿舎 虹の松原ホテル【佐賀】

＜Step1　理解する＞＜Step2　解明する＞
日時：2012年08月30日（木）　10:30 ～21:30
ファシリテーター：田中岳（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　准教授）

＜Step3　解決する＞
日時：2012年08月31日（金）　09:30 ～16:00
ファシリテーター：田中岳（Q-Links事務局／九州大学 教育改革企画支援室　准教授）